あずま第一高等学校便利屋部

そーだ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あずま第一高等学校便利屋部

【Ｎコード】
Ｎ２９４５Ｙ

【作者名】
そーだ

【あらすじ】
個性派揃いのあず高便利屋部員たちが大暴れ！
果たして、便利屋部員たちは生徒や教師からの依頼を全て解決することが出来るのか？！
作者、そーだ初・個性的青春ハチャメチャ学園コメディー！

プロローグ―説明に換えて（前書き）

この物語に出てくる人物、建物、場所等は全て実在しません。
作者初めての作品です。どうか、温かい目で見て下さると幸いです。

プロローグ―説明に換えて

―――あずま第一高等学校

通称『あず高』。あずま市の最北に位地している公立校。
男子は学ラン、女子はセーラー服を着て、学校生活を満喫している。
全校生徒６００人、１学年５クラスの４０人編成である。

あず高には、創立当初から存在する「便利屋部」という特殊な部活動がある。
生徒や教師からの依頼を部員達の気分によって承るのが主な活動である。
部長、副部長、３年生部員代表１名の３名が誘った生徒しか入部できない仕組みになっている。
そのため、部員は各年度によって異なるが、４～６名が相場である。
依頼者は校舎３階にある便利屋部部室を直接訪れ、依頼をしなければならない。
顧問がいない特殊な部活動のため、全責任を生徒が背負って活動しなければならない。

この物語は、あず高便利屋部の活躍を描いた青春物語である。

日常―登場人物紹介に換えて

あずま第一高等学校、校舎3階のとある部室にて。

「ねぇ、眠たい・・・。」

「それにしても、暇ですね。」

「依頼は？」

「まだ無い。」

「あぁ、今日も暇潰しか。」

あず高一有名な部活動、「便利屋部」。
生徒や教師からの依頼を活動としているが、現状は部員たちがいかに暇を潰すかを考えるのが活動となっている。

今年の部員数は、3年生が3人、2年生が2人の合計5人。
そして、5人共周りから「個性的」と言われているのが特徴だ。

まずは、2年A組の大間（オオマ）兎杷（トワ）。通称マト。
ショートカット、地毛の茶髪、身長145cmで華奢。肌の色素が薄い女の子。
学年トップ、模試では全国トップの成績を誇るが、運動能力は皆無。
「マト」の由来は、「smart」からきている。人の心の動きに敏感である。

次は、同じく2年A組の梧桐（ゴトウ）沙織（サオリ）。通称イオ。

ロングヘア、地毛の薄い灰色の髪、緑色のぱっちりとした目が特徴的な女の子。
父はイタリア人、母は日本人というハーフの帰国子女。
マトの幼馴染。英文学は原文で読むのが好き。成績は学年３位。
「イオ」の由来は、天文学が苦手な事からきており、マトにつけられた。
誰にでも優しく、人懐こさがあり、人望に厚い。

次は、３年Ｃ組の草摩（ソウマ）　咲人（サクト）。通称サクト。
短髪の黒髪が映える身長の高い便利屋部部長。自他共に認める便利屋部の策士である。
人脈が幅広く、相当な権力者にも顔が利く。
全校生徒の顔と名前を覚えており、成績などの個人データを閲覧できる特別な生徒。
高校側から特別視されているが、その理由は本人でさえ不明である。
策士と言われているが、成績は下の上。運動神経は他人から羨ましがられるほど良い。

次は、３年Ａ組の鐘持（カネモチ）　好汰（コウタ）。通称コウタ。
短髪の黒髪が映える身長は人並みの便利屋部副部長兼生徒会執行部副会長。校内一有名な「貸し借りの鬼」。
今年の便利屋部から、依頼をした生徒や教師は便利屋部へお礼、もしくは情報提供をしなければならなくなったのはコウタが原因である。
彼の中で依頼をすることが「貸し」、依頼を解決にあたって情報提供をしたり、解決後にお礼をしたりすることが「返却」となっている。
笑顔がチャームポイントだが、貸し借りのこととなると冷酷な殺人鬼のような顔をする。
非常に金に執着しており、部員全員に呆れられるほどのケチ。

成績は中の下、運動神経は人並みである。
最後は、３年Ｃ組の森本（モリモト）　馨（カオル）。通称カオル。
６対４で分けた短髪の黒髪、３年のサクト、コウタよりも小柄で華奢。つぶらな瞳が特徴的な男の子。
他人に上目遣いをすることで他人の本性を見破ることができる。猫に懐かれやすく、自身も三毛猫を飼っている。
サクト、コウタとは小学校の時からの幼馴染。
成績は中の下、運動神経は人並みである。

「マト、何見ているの？」
「・・・サッカー部と野球部と陸上部。」
「あぁ、グラウンドか。」
「うん。窓を閉めてても、声が聞こえてくるよ。」
「そっか。」
マトとイオがクスクス笑いながら、話を続ける。

「依頼、全然来ないけど、これで何週間経ったの？コウタ。」
「５週間突破！オメデトー！」
「どこがめでたいの、それ。」
「まぁ、コウタが鬼のような顔をしなくていいだけ平和か。」
「まぁ、な・・・。」
「オイ、２人共、それどういうことだよ。」
「いやぁ、それは・・・。」
「えっとー。」
サクトとカオルがコウタから逃げるように追いかけっこを始める。
５週間も依頼が来ず、暇を持て余していた便利屋部に依頼が来るのは２日後のこと・・・。

？

5月の暖かな日、便利屋部の部室にノック音が響いた。
その途端、部員たちの目に光が差した。
部長であるサクトが急いで部室のドアを開けると、そこには怯えた目でサクトを見る1人の男子生徒がいた。
「えっと・・・僕、今日ここへ依頼に・・・来たんですけど、そのーいいですか？」
「大歓迎だ！」
男子生徒は、サクトの高いテンションについていけないまま、「はぁ」と頼りない返事をした。
「君は、2年E組の葉山（ハヤマ）詩（ウタ）くんで合っているよね？」
「どうして、僕の名前を？」
「一応、全校生徒の名前は頭に入っているので。」
サクトが得意げにクスッと笑うと、葉山はまた頼りない返事をした。
「ねぇ・・・依頼は？」
マトが尋ねると、葉山は俯きながらこう言った。
「・・・好きな子への告白を成功させたいんです。」

「分かった。それなら、葉山くんは俺達便利屋部に何をしてくれる？」

コウタの鬼のような目が葉山に向けられ、葉山は余計に怯えながら口を開いた。

「えっと、そしたら僕は・・・出来るだけ、情報を提供します。」

「情報の質は問うが、それでも構わないのか？」

「・・・か、構いません！」

葉山はコウタの問いに慌てて答えた。

コウタは、しばらく部室の天井をを見つめて考えた後、頷いた。

それを合図にサクトが葉山にこう切り出した。

「それでは、この依頼、便利屋部が責任を持ってお引き受けいたします。」

葉山に一礼をしてから、イオが葉山に部室を出るように案内した。

「もし、情報が必要になったらこちらから呼び出しますから、部室まで来てくださいね。」

「わ、分かりました。よろしく・・・お願いします。」

葉山は、イオに一礼をしてから部室を出て行った。

「さてと、大変なことになったな。コイツ、相当な厄介者だ。」

サクトが予め電源を入れていたパソコンのディスプレイを見て、そう呟いた。

ディスプレイには、もう既に葉山に関するデータが表示されていた。

?

「厄介者かぁ。何となく、顔を見た時にそんな感じはしてたけど・・・。」

「また、上目遣いで人を見たのか。」

カオルの発言にサクトが少しだけ呆れる。
部長として幼馴染としても、カオルの能力を心配しているサクトは、その能力を依頼の中で使用しつつもどこかいつも不安げであった。

「少しだけだから、別に支障はない。」

「ふぅーん。じゃ、全員に葉山のデータを紹介しておく。まず、成績。コレは問題なし。マトよりは下だけど、2年としてはいい方にいると思う。イオの下辺りかな。」

「なるほど。でも、私、2年生であんな人初めて見ました。」

「やっぱりな。イオがそう言うのも分かる気がする。」

「どういうことですか?」

「地味で人と接することが苦手。短すぎる髪と白い枠の眼鏡のくせに目立たない体質。友達は片手で数えられるほどしかいない。」

「そ、そうだったんですか。」

「まず、依頼を解決するには葉山自身を変えなきゃ、無理だな。」

サクトの発言にコウタが無言で頷いた。

「カオル、“アイツ”を呼んで来い。」

「了解。」

カオルは、サクトの指示通りに部室を出て、“アイツ”を探しに行った。

３０分後、部室のドアが開いた。

「久し振りだな、学校一のイケメン君。」

?

「二度とその面、見たくなかったけどな！」

葉山と同じ2年E組の井上（イノウエ）奏（ソウ）。

彼は、「学校一のイケメン」と評されている。

1年の頃、調子に乗った結果、校内に10人以上の彼女をつくってしまい、「本命以外の彼女と縁を切る」という依頼を便利屋部にしたことがある。

「本命さんとは、上手くいってるのか？」

「まぁな。」

井上は、先輩に敬語を遣うことが嫌いで便利屋部員にもタメ口で喋るのが常だ。

サクトは、井上の事を気に入っているため、井上がどのような態度を取ろうとお構いなしだ。

「早速だが、オマエからの借りを返してもらう時が来た。」

「用件は？」

「同じクラスの葉山を改造しろ。」

「えっ？それ、どういうこと？」

「イケメンに進化させろ！」

「ハァ？」

井上の叫びが部室内に響いた。

「オマエのセンスを最大限に生かして、葉山をイケメンにさせたら、借りを返したことになる。まぁ、それにはコウタの許可が必要だけどな。」

「・・・分かったよ、やればいいんだろ？」

「但し、葉山を改造する金は部費としてこちらから出す。いいな？ありったけの金を使ってでも、葉山を改造させろ。」

「使い放題ってことだな？」

井上の余裕そうな顔を見て、コウタが鬼の形相でこう言った。

「領収書は全部出してもらう。」

「わ、分かってるよ、そんなこと！誰が黙って、無駄遣いするか・・・。」

少し焦った様子で井上は返事をする。

「期限は明後日までだ。分かったな？」

「一々、うるせぇな！分かってるよ。ハァ・・・、やっぱり変わってないんだな、1年前と。」

「人はそんな簡単に変われるものじゃないからな。」

そう言うと、サクトはニッコリ笑った。

？

翌々日の放課後、井上が葉山を連れて、便利屋部を訪れた。

「あ、あのっ・・・僕、こんなの、初めてなんですけど・・・。」

葉山は相変わらず、自信のない表情をして俯いている。
葉山の髪は、長さを変えずにワックスで外ハネがついていた。
そして、眼鏡ではなく、コンタクトレンズに変わっていた。

「コレで２００００円以下だからな！感謝しろよ、便利屋部。」

井上は、自慢げに領収書をコウタへ差し出した。

「・・・分かった。それじゃあ、後は便利屋部の出番だな。」

井上は、コウタの言葉を聞いてニヤッと笑い、部室を後にした。
イオが「ありがとうございました」と笑顔で言う姿すら目に入っていなかった。

葉山は、井上が部室を出てから、ホッとしたような顔をした。

「どうしたんですか？ヤケに安心したような顔をしていますけど・・・。」

サクトの問いかけに葉山は体をビクッと反応させた。

「あ、あの人っ、僕・・・すっごく・・・苦手で、怖いんです。」

「同じクラスなのに、ですか？」

「同じクラスでもっ・・・触らぬ神に祟りなし、みたいなものです。」

「へぇー、そうですか。それなら、まず告白は無理と考えていただいて構いませんね。」

「えっ？」

葉山は、サクトの言葉を聞いてようやく顔を上げた。

「ねぇ、気付かないの？そんな性格じゃ、好きな子だって振り向いてくれないってことに。私みたいな変わり者だって、それくらい分かるよ？」

マトが葉山に向かって微笑を浮かべる。

「マトの言ったとおりです。好きな子に対して、その性格を変えないなら、ここで終わりです。葉山くんは、今までの自分が好きだったんですか？」

「ほ、本当の・・・僕？」

「人と接することが苦手、自分に自信が無い、俯きがちでダサイ。そう言われても、反抗できないのが事実ですよね？そんな自分で葉山くんは、本当に満足しているんですか？」

「僕は・・・。」

葉山は、俯こうと首を動かしてから口を動かした。

「変わりたい、です。」

「その言葉を待っていました。」

サクトがニッコリと葉山に向かって笑った。

葉山は、すぐに顔を上げた。

「では、葉山くんの想い人に関しての情報を要求する。」

コウタの冷たい声が部室に響いた。

「井上　麻耶っていう人で・・・井上くんの・・・妹です。」

「サクト、データは？」

「もう表示済み。彼女は、ウチの学校の1年生。幸い、彼氏無し。恋愛偏差値は葉山くんと同等だと思う。」

コウタは、サクトの情報を聞いてから、葉山と話を続けた。

「彼女を好きになったきっかけは？」

「井上さんは、僕と同じ美術部なんです。凄く綺麗な絵を描く子だと思って、絵から作者本人に興味が湧きました。それから、少しだけ会話をするようになりました。今は・・・まだ進展していません。」

「ふぅーん。」

「井上さんの好きなタイプは、大人しくて落ち着いている美術部の人、らしいよ。」

サクトが部室全体に聞こえるように報告した。

「美術部っていうところは合格だね。」

カオルがそれを聞いて、安心したように笑った。

「葉山くんの場合は、大人しすぎると思います。後、もう少し落ち着いて話せたら喋り方は違和感がなくなると思いますよ。」

イオが葉山に向かって助言をする。

しかし、葉山は俯いたままだった。

「ねぇ、どうしたの？美術部っていうところは、合格なんだよ？」

マトが机に座りながら、首を傾げた。

「・・・僕、来週で学校辞めるんです。」

「えっ？」

部員たちの顔が曇った。

?

「・・・家の事情で働くことになりました。もう、就職先は決まっています。だから・・・最後に井上さんへ想いを伝えたいと思って、依頼をしたんです。・・・本当にゴメンなさい。」

葉山は、頭を下げた。

「それなら、余計に頑張るしかないね。」

カオルが葉山に駆け寄った。

「それ・・・どういうことですか？」

「葉山くんの最高の思い出として、便利屋部が告白の成功をプレゼントする！それでいいよね、皆？」

カオルの問いかけに部員たちが笑顔で了承した。

「今日はここまでにします。明日から、毎日ここに来て下さい。色々と情報交換をします。」

「わ、分かりました。」

サクトの言葉に葉山は慌てながら一礼し、部室を出た。

その後、便利屋部は作戦会議を開いた。

コウタがホワイトボードの前に立ち、ペンで作戦内容を書いていく。

サクトは、机に頬杖をつきながら作戦をベラベラと話す。
カオルは、それを適当な相づちで流している。
イオは、それを真面目に頷きながら聞いている。
マトはというと、机に座りながら足をブラブラ揺らし、窓の外を見ながら歌をうたっている。

これが便利屋部の部活動の実態である。

ちなみにマトは、この後イオから分かりやすく作戦を説明されるので、共通理解に問題はない。

「作戦実行は、葉山くんが学校を辞める日の前日。」

「了解！」
コウタ、イオ、カオルの声が揃った。
その後でマトが「りょーかい」と歌に乗せて呟いた。

それから、便利屋部と葉山は密に話し合いを進め、遂に作戦実行日となった。

場所は屋上。特別に便利屋部の名を借りて、学校側から開放してもらえることになった。
告白する時の言葉は、マトとイオからの助言を得て、決めてあった。
喋り方はサクト、コウタ、カオルの力を借りて、どうにか克服をした。
性格は、葉山自身が部員たちから助言を求め、麻耶のために自力で改善した。
葉山が設定した時間に、ちょうど麻耶はやって来た。

「葉山先輩、どうしたんですか？こんな所で。」

「ゴメンね、急に呼び出して。話があって。」

「話ですか？」

葉山は、麻耶に明日で学校を辞めることとその理由を詳しく述べた。麻耶は、戸惑いながらも必死でその事実を受け止めようとしていた。

「私、先輩の描く絵、大好きだったんです。でも、もう、その絵が見られなくなるなんて・・・嫌です。」

麻耶は、ゆっくりと涙を流した。

「僕も井上さんの描く絵が大好きだった。それに・・・井上さん自身も。」

「えっ・・・？」

「井上さんの描く絵が好きになってから、井上さんのことも好きになった。今まで言えなくて・・・ゴメン。」

「先輩・・・、私―。」

翌日、便利屋部の部室に置手紙があった。

「えっと、『ありがとうございました。彼女と付き合うことになりました。　葉山　詩』。・・・無事に依頼解決だ。」

「やったー！」

サクトは、ホッとしたように笑顔を浮かべる。
コウタは、お礼を色々と思案している。
カオルは、一安心して椅子に腰を下ろす。
イオは、マトとハイタッチをする。
マトは、それに応え、イオと笑顔を浮かべる。

貸し借りについては鬼のようだが、依頼者の幸福のためなら何でもするのが便利屋部である。

5週間振りの依頼が解決したことで、便利屋部の株が上がり、それ以降しばらくは依頼者が続出した。
しかし、そのほとんどがつまらない依頼だったため、部員たちは「依頼却下」の連続。
また、便利屋部の株が下がり、部室を訪れる人は少なくなった。

日常が始まった。

「ねぇ、イオ、喫茶店行こうよ～。」

「喫茶店？いいけど、マトが喫茶店なんて珍しいね。」

「ちょっと会いたい人がいるから。」

「会いたい人？」

ある日の帰宅途中、マトとイオはある喫茶店へ入った。
適当な席に座り、注文を終える。

数十分してから、注文していたものが運ばれてきた。

「お待たせしました～、って、アレ？便利屋部の―。」

そこにいたのは、葉山だった。

「葉山くん？！ここで働いていたんですね。」

「サクトから就職先を聞いたから、来た。イオは、何も知らなかったから驚いている。」

マトは、イオの様子を見ながらクスクス笑っている。

イオは、それを見て、マトに向かって怒ったように頬を膨らませる。

「相変わらず、ですね。それでは、ごゆっくり。」

葉山は、ハキハキした話し方でそう言った後、別のところへ行ってしまった。

「葉山くん、元気そうだったね。」

「うん。」

2人は、互いに笑い合った。

―一つ目の依頼―　解決

？

梅雨時期らしい天気の２３時、あずま市のライブハウスに歌声が響いた。

「ネェ、知ッテル？『にゃっくる殴（ぱんち）』ッテ、バンド。」

「インディーズノ、パンクバンド・・・デショ？」

カタカナに聞こえる非行少女達の声。

そんな非行少女達を魅了するのは、彼女等と変わらない歳の少女だ。

「続いての登場は、にゃっくる殴（ぱんち）だ！」

司会者が観客のテンションを上げる。

ステージ上に現れたのは、ショートカットの金髪にピンク色のメッシュを入れた非行少女。

その後ろには、ギター、ベースを抱えた非行少年や過去に実力派と謳われたドラマーがいた。

非行少女が口を開け、言葉を紡いだ。

その途端に先ほどまで馬鹿騒ぎをしていたはずの非行少年、少女達が黙り込む。

「今日は、アタシ等の歌を聴きに来てくれてありがと。親とか教師

とかウザイけど、今夜はそういうの忘れて、アタシ等と一緒に騒ぎまくろうゼ！ケケケ、今日はパーティだ！」

少女の言葉が終わり、少女がニタァッと笑うと、歓声が上がった。

それと同時にドラマーの合図で曲が始まった。

翌日の便利屋部の部室では、ある事件が広まっていた。

「あずま市に非行少年、少女が大量発生？」

「朝っぱらから、騒いでたなぁ。ウチの担任。」

「どうやら、ウチの学校に原因がいるらしい。」

3年生の3人組が揃って溜息をつく。

「イオ、情報提供のために誰か依頼者呼んで。」

「分かりました。」

サクトの指示でイオが呼んだ人物とは・・・。

数分後。

「だから、なんで俺なんだよ！俺、もう借りは返しただろ？」

「いや、オマエならあの事件の原因である人物を知っているかと思

って・・・。」

「あの事件？あぁ、アレか？非行少年だとか、何とか。あの原因なら、何となく知ってる。」

「教えろ。」

「貸し１つってことでいいですか？便利屋部さん。」

「いや、これはオマエが勝手に喋ったことにするから、貸し借り一切関係なし。そうだよな、コウタ。」

「うん、そういうことだ。井上、後はよろしく。」

「それ、どういうことだよー！」

井上の叫びが学校中に響き渡った。

？

井上の情報によると、あず高の1年生の女子生徒がその事件の原因であるらしかった。

「1－Eの女子生徒、秋吉　カエデ。それが今回の事件の原因だ。」

井上からの情報を頼りにサクトがより詳しい情報を掴んだ。

あずま市の非行少年らが集うライブハウスで行われるライブに出演するインディーズバンド、にゃっくる殴。

そのバンドのボーカルが彼女である。

彼女は、天性の歌声を持つと賞賛されて、バンド内1番の人気を誇っている。

先輩や教師に敬語をつかわないことで校内の評判は悪く、制服をパンク系に改造、染めた金髪にピンク色のメッシュを入れていることで風紀も乱れている。他人には無関心であるため、直す気はない。

本人自身、変人であることを自覚している。派手な格好は好きだからだと言ってやめない。

「こんな人、いるんですね・・・。」

イオが驚き、口を開けたまま硬直していた。

「マトとはまた違った人だね。」

マトはクスッと笑って、窓の外を見ていた。

「そんなワケで教師からの依頼の9割が秋吉に関する依頼だ。」

サクトが紙の束を見て苦笑する。

「とにかく、本人呼ぶしかないなぁ・・・。」

数十分後、便利屋部の部室を思い切り開ける者がいた。

「便利屋部の皆さんがまさか、アタシを呼ぶとはね。悪いけれど、これからライブなんだ。すぐに帰ってもいいかい？ケケケ。」

金髪が揺れ、ニタァッと笑った秋吉がマトに近付く。

「何か用？」

マトが首を傾げると、秋吉がニコッと微笑んだ。

「やっぱり、天才さんだ。ケケケ、年上だけど年下に見える、アタシとは違った変わった人だ。」

「やっぱり、天才さんだ。クスッ、年下だけど年上に見える、マトとは違った変わった人だ。」

マトもそれに続けて返す。

2人で笑い合った挙句、その後続いたのは沈黙だった。

「イオ、これ、どうにかしてくれる？」

「私にもどうにもなりません。」

天才、とは凡人には分からないものであった。

？

「なんで、アタシを呼んだんだい？ケケケ。」

今だ怪しげな様子を身にまとった秋吉は、便利屋部の部室に置かれた椅子に座り、足を組んで、ふんぞり返っていた。

秋吉の前にサクトが立ち、事情の説明をする。

「最近、あずま市で非行少年、少女が増えていることを知っていますか？」

「何となくは耳に入っているよ、ケケケ。」

「その原因が貴方にあることも？」

「あぁ、何となくは。」

「やめる気は？」

「あるワケ無いだろ。」

そう言って、秋吉はガムをポケットから取り出して、口に含んだ。

「あず高の教師全員が貴方の敵です。」

「知ってるよ。」

秋吉は、ガムを噛みながらサクトを睨みつけた。

「ねぇ・・・天才さんはどうしたい？」

マトが窓の外を見つめながら、秋吉に尋ねた。

「・・・敵なんていくらいたって、構わないさ。アタシが生きている世界は、敵だらけだからね。」

ガムをふくらませ、天井を見上げた秋吉はそこで動きを止めた。

「それじゃあ、仲間は？」

マトがまた言葉を紡ぐ。

「・・・仲間？アタシには、バンドの仲間がいる。それで十分だよ、ケケケ。」

「校内にはいないの？仲間。」

「アタシと趣味の合う人間が見つからないのさ。」

マトが秋吉の方を振り返った。

「つくる気は？」

「・・・ある。」

「分かった。もう帰っていいよ。」

「エッ？」

「ライブ、でしょう？」

マトが首を傾げたと同時に、秋吉は椅子から立ち上がった。

「さすが、天才さん。何もかも分かっているんだね。ケケケ、それじゃあ。」

秋吉は手を振りながら、部室を出て行った。

それから、マトが口を開いた。

「今回は、マトの独断で作戦を立ててもいいかな？」

?

「マトが？」

コウタが目を丸くして、マトを見つめた。

「うん。あの人が気に入った。」

「マトが他人を気に入るなんて、珍しい。」

カオルが微笑みながら呟いた。

「やってもいい？サクト。」

しばらく、間が空いてからサクトが壁を見ながら呟いた。

「マトの好きにしていいよ。」

「ほんとう？」

「本当。」

マトがクシャッと笑ってから、イオに抱きついた。

「それじゃあ、イオも手伝ってね。」

「えっ？私が？」

マトが黙って頷くのに、イオは泣く泣く承諾した。

それから、マトはサクトに生徒からの依頼がきていないかを聞いた。

「・・・それなら、丁度。」

サクトが渡した1枚の紙に書かれていたのは、冬美(ふゆみ)スミレという女子生徒の名前と依頼内容だった。

サクトが使っていたパソコンのデータによると、彼女は1‐Cの生徒らしい。

依頼内容は、「音楽の趣味が合う友達をつくってほしい」という秋吉と全く同じものだった。

「彼女は、教師からの評判が良い。真面目で心優しく、風紀を乱さない。しかし・・・変人に興味があるという変わった好みがある。」

サクトは、そう言った後、溜息をついた。

「でも、友達は少ない人みたいですよ。マト、どうする？この子を呼ぶ？」

マトは、依頼の書かれた紙に向かって、1度瞬きをした後頷いた。

イオは、すぐに部室を出て、冬美を探しに行った。

「マト。」

「何？カオル。」

「・・・イオのこと、どう思ってる？」

カオルがマトに向かって、ふんわりと笑った。

「だいすき。」

「そうじゃなくて。」

カオルがマトに向かって、真顔になった。

「・・・ひとりになりたくないだけなのかもしれない。」

「えっ？」

「イオがいれば、怖くないから。何も。」

マトはそう呟いてから、少し間を空けて、言葉を紡いだ。

「だから、サクトはマトをここにいれたんでしょう？」

マトは、サクトの方へ視線を寄越した。

「違う？」

「・・・ちがう。」

「そっか。それなら、安心した。」

マトは俯きながら笑った。
サクトの言葉に多少のタイムラグがあったことを見逃さずに。

沈黙の最中、部室のドアが思い切り開いた。
「マト、呼んできたよ。」
「イオ、おかえり。」
マトが顔を上げて、イオに微笑んだ。
イオの後ろには、冬美がおり、イオが部室へ招き入れると、冬美はオドオドした様子で部室に入ってきた。
イオが冬実を椅子に座らせると、彼女の後ろをおだんご結いした黒髪が少しだけ揺れた。
「・・・あの、私の依頼、本当に解決してくれますか？」
「もちろん。それと、今回は、貸し借りは一切しなくていいよ。」
「えっ？」
コウタと冬美の声が重なった。
「マトの独断だから、貸し借りとかいう便利屋部の面倒なシステム

は一切使わない。」

「本当ですか？」

「うん。だから、貸し借りの心配はしなくていいよ。」

コウタの顔がこわばっているのを見て、マトはそれを笑った。それから、パソコンのディスプレイに秋吉のデータを表示させた。

「それじゃあ、早速。この人のこと、知ってる？」

「勿論です。秋吉さん、ですよね？」

「やっぱり、彼女は1年生の中でも有名なの？」

「そういうことじゃなくて・・・。」

冬美が必死に誤魔化そうとしている表情をマトはまじまじと見つめている。

「『にゃっくる殴』だからです！」

マトと冬美の声が重なり、冬美が素っ頓狂な声を上げ、マトが大声で笑った。

「マト、あんまり真面目っ子をからかうな。」

サクトの注意にマトが「はーい」と子供っぽく返事をする。

「便利屋部には、何でもデータが揃ってるんだよ。冬美さんがパン

クロックが好きなことも、『にゃっくる殴』ファンだってことも、引っ込み思案で友達が少ないことも。」

「そうだったんですか。私、何も知らなかった。」

「勿論、秋吉さんが『にゃっくる殴』のボーカル、カエデだってことも、パンクロックが好きなことも、友達が欲しいことも、みんな知ってる。」

冬美の驚きと喜びが混じった顔を見て、マトは微笑んだ。

「やっぱり、人って面白い。冬美さん、どうする？」

冬美は椅子から立ち上がり、思い切ってこう言った。

「お願いします！私に・・・友達を・・・友達をつくって下さい！」

？

数日後の２２時。

あずま市のライブハウスの前にはマト、イオ、そして、冬美の３人が私服姿で集まっていた。

「イオ、大丈夫？」

「う、うん、何とか・・・。ちょっと怖いけど。」

「大丈夫です。『にゃっくる殴』の出番はもう少しですから。」

２年の２人よりも見るからに生き生きしている冬美は、楽しそうにライブハウスの中へ入っていった。

「ネェ、知ッテル？『にゃっくる殴』。」

「知ッテルモ何モ、私、モウファンニナッチャッタ。」

ケラケラと笑う非行少女達を見てから、イオが自分も同じ穴の狢であることを知った。

マトと共にゆっくりとライブハウスの中へ入り、冬美が手招きしてくれた方へと走った。

司会者がステージ上に現れた。

「次のバンドは、皆お待ちかね、『にゃっくる殴』だ！」

歓声とも悲鳴ともとれる声が会場内に響く。

「うるせぇぞ、オマエ等！」

秋吉、否、カエデがマイク片手に登場する。それと同時にまた、歓声が上がった。

「まっ、元気なのはいいことだけどな、ケケケ。今日は、アタシの友達が来てるんだ！オマエ等、あんまり騒ぎすぎて、アタシの友達のこと、傷付けたら承知しねぇからな！」

カエデの言葉を聞き、怯えながらも観客から歓声が上がる。その反応にカエデは、ケケケと笑った。

数日前、それは冬美がマトの目の前で友達をつくるように依頼した日のこと。

「了解。それじゃあ、イオ、秋吉さんに連絡して。」

「えっ？私、電話番号知らないけど。」

「サクトなら知ってる。」

サクトが呆れながら、秘蔵データをイオに見せ、イオは秋吉に電話をかけた。

『何？私なら、今ライブのリハ中さ。忙しいから、後にしてくれるかい？ケケケ。』

「・・・友達、できます。」

『えっ？』

「マトが言ったとおり、友達を紹介します。」

イオが携帯電話を冬実に渡した。

「わ、私、1年C組の冬美　スミレといいます。私、『にゃっくる殴』のファンでカエデさんのことが大好きで尊敬していて・・・えっと・・・、その・・・凄く興味があって・・・。」

『何？アンタ、もしかして、アタシのこと、気になってる？変わった奴もいたもんだ、ケケケ。』

「良かったら、お友達になってくれませんか？」

2人の間に沈黙。

『本当・・・に言ってるのか？』

「はい。本気です。私、何度も『にゃっくる殴』のライブに行ったことあります。それくらい、本当に好きです。私は、秋吉さんとしてじゃなくて、カエデさんと友達になりたいです。」

『バカだね、アンタ。』

「えっ？」

『アタシはアタシだ。アタシ以外の代わりなんかいない。秋吉　カエデもカエデも全部アタシ。アタシに還元されるのさ。だから、カエデと友達になるのは秋吉　カエデと友達になるのと同じこと。アンタがもし、アタシと友達になって、他人から嫌われても構わないのなら、アタシはいくらだって友達になってやる。でも、アンタがアタシと友達になって嫌われたからって、アンタがアタシのことを嫌えば、アタシもアンタのことを嫌いになってやる。アタシと友達になるには、それくらいの覚悟がいるってモンさ。』

秋吉はそう言って、電話口でケケケと笑った。

「・・・覚悟くらい、あります！馬鹿にしないで下さい。」

『気に入ったよ、アンタ。アンタのこと、いつかライブに招待してやる、ケケケ。』

「招待されなくても行きますから！それがファンってもんです。」

『フンッ、面白い奴だ。ますます気に入った。今日からよろしくな・・・、スミレ。』

「こちらこそよろしくお願いします・・・、カエデ。」

その電話が終わってから、秋吉は有言実行した。

それが数日後の「今」である。

「・・・今日のラストだ。これは、アタシの友達に捧げる新曲だ。」
曲名を告げたとたん、秋吉が冬美に向かってニコッと笑った。
「『Ｖｉｏｌｅｔ』、秋吉さんらしい率直なタイトルですね。」
イオが呟く。
今までのカエデらしくない優しい旋律で１つ１つのフレーズを大事そうに歌う姿は、『にゃっくる殴』のボーカルとしての新たな一面を見せ、カエデの人気はさらに上昇した。
翌日の放課後、あず高の屋上にて。
「昨日、すっごく格好良かったよ、カエデ。」
「どの曲が１番好きかスミレの好みが聞きたい、ケケケ。」
「それはもちろん――――。」
冬美は、自らの名を口にした。
所変わって、便利屋部の部室。
「イオがいなくなった？」
「理由は？」
「何もかも？」

3年生それぞれの質問にマトは首を横に振るばかりだった。

「教室にはいた。マトよりも先に教室に出たことをクラスの子から聞いた。だから、部室に居ると思ってた。でも、置手紙があったの。」

マトは、先ほどまで自分が読んでいた手紙を3人に渡した。

『退部します。さようなら。』

「これだけが書いてあったの。」

マトが床にへなへなと座り込んだ。

「・・・マトは・・・どうすればいいの？」

床にぽたりと水滴が落ちた。

？（前書き）

今回は、マト目線でお送りします

?

馬鹿だと思った。

なくなったものの大切さをなくなった時に実感するなんて。

情けないと思った。

彼女が居ないと何も出来ない自分がいることに。

「マト。」

顔を上げると、いないことを分かっているはずなのに、イオがいると思って部室内を探してしまう。

「コウタ、か。」

「ゴメンな、俺で。」

コウタが苦笑いするを見て、また溜息をついてしまう。

「・・・ねぇ、サクト。」

サクトが顔を上げたのを察知して、こう切り出した。

「どうして、マトとイオを部員にしたの？」

「マトのことは、入学当初から耳に入っていた。」

サクトによると、2年の頃から便利屋部だった彼はマトのことを絶対に便利屋部に入れたかったらしい。

「どうして？」

「・・・天才に憧れていたから。」

「それだけ。」

「それだけ。後は、天才を僻む凡人特有の感情からくる興味から。」

「・・・ふぅーん。それじゃあ、イオは？」

「イオは、マトにないものを持っている女子生徒が必要だと思って入れた。」

「そっか。」

「後、マトのことが本当の意味で好きな女子生徒でないと入れさせないと決めてた。」

「本当の意味？」

「マトの事情がすぐに噂として聞こえてきていたから。」

「そのことは・・・。」

言わないでほしかった。

思い出したくない過去だった。

怖かったから。

いや、また、ひとりになることを恐れていたから。

イオがいれば、何も怖くないことを知ったのは、高校生になってからだった。

それ以前にもずっとイオと一緒に居たのに、恐怖心が薄れるのに気付くのが遅すぎた。

思い出したくないことだから、何時頃だったかは覚えていない。

しかし、中学の頃だったことだけ覚えている。

「大間　兎杷。よろしくお願いします。」

自己紹介してから、自分の席に座る。

そんなことをしていると、突然誰かが言った。

「なぁ、大間って頭いいんだろ？」

嫌味のように聞こえた。

別に自分のことを頭がいいと認識していないからだ。

頭がいい、という概念自体、理解しがたいものだった。

「・・・別に。」

「だって、成績トップなんだろ？いっつも１００点なんだろ？」

どうして、知っているのだろうと思った。

個人成績表もテスト用紙など誰にも見せたことなど無かったのに。

「オマエ、そのことは言うなよ。」

ざわめくクラスメートたち。

「ヤベッ。」

「ねぇ、バレたらどうするの？」

「大丈夫だよ。アイツ、あぁいうところは馬鹿だから、気付いてねぇって。」

周りは、敵ばかりだった。

それからのことだった。

テスト用紙が盗まれ、返された時には落書きがされていた。

クラスの誰に話しかけても、返事が来なくなった。

廊下を歩いていると、誰にでも噂話をされるようになった。

そして、終いには。

ひとりになった。

いや。

ひとり、じゃなかった。

近くには必ず、イオがいた。

「近くにいすぎたから、気付かなかったんだ。」

自分の思いと言葉がひとつになった。

それから、泣いた。

「マト。」

サクトの声で少しだけ我に返った。

「イオのことを知ったのは、マトの事情を知ってからすぐだった。俺が考えていた部員の条件にピッタリだった。イオは、マトのことを本当の意味で好きでマトには無いものを持っていた。」

「だから、入れたの？」

「そうだな。」

「それじゃあ、あの時のタイムラグは何だったの？」

あの時、とは冬美さんを探すためイオが部室を出ていた際話した時のことだ。

「マトの言ったこともあながち間違いではなかったからだ。２人が幼馴染だという事を知ったのは、２人を入れようと思っていることをコウタとカオルに伝えてからだった。」

「そっか。それなら、納得した。」

それから、３人がイオが戻ってこないと判断し、部活動は終わった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2945y/

あずま第一高等学校便利屋部

2011年12月25日22時55分発行